

1981. 畠田翠山と南方熊楠. 隨筆誌「土」
1981. 「紀伊続風土記」物産の部について. くちくまの 50 号.
1982. 畠田翠山の「野山草木通志」「紀南六郡志」に引用された文献について. くちくまの 52 号.
1982. 畠田翠山の「紀南六郡志」について. 南紀生物 24 (1): 31-35.
1982. 原田一夫「紀州介品諸録」の付記. 田辺文化財 (25): 46-47.
1983. 杏雨書屋の紀州関係叢書目録付, 畠田翠山の本草書紀州三部作に引用された文献解題補遺. くちくまの 55 号.
1984. 備長炭と炭素纖維. くちくまの 58 号.
1985. 南方熊楠と病跡学. くちくまの 62 号.
1985. 岩瀬文庫の紀州関係本草書・博物学書. くちくまの 63 号.
1986. 図書紹介・鶴見和子「殺されたもののゆくえ」—私の民族学ノート. くちくまの 65 号.
1986. 紀州藩の本草家, 畠田翠山の業績. きのくに文化財 (19): 23-29.
1987. “南方熊楠外伝”を読んで—宮武省三・里見八犬伝・コノテガシワ. くちくまの 68 号.
1987. 由良町海獣島に回遊したアシカ. くちくまの 70 号.
1987. 盛永俊太郎・安田健編『享保・元文諸国産物帳集成 VI 紀伊』:「紀州産物帳」「紀州分産物絵図」「紀伊殿分. 紀州勢州産物之内相残候絵図」「紀州在田郡広湯浅庄内産物」. 真砂久哉解題. 科学書院. 955-962.
1987. 『南方熊楠菌誌』第 1 卷. くちくまの 71 号.
1987. 南方熊楠外伝を読んで—宮武省三・里見八犬伝・コノテガシワ. くちくまの 68 号.
1987. 神島の研究と保護の歴史. 関西自然保護協会報 (14): 7-10.
1987. 「セルボーン博物誌」と「南方熊楠菌誌」—書簡形式による博物誌. 土 (103): 44-45.
1988. 南方熊楠再発見. 土 (105): 40-41.
1988. 那智山の南方熊楠. 隨筆誌「土」
1988. 南方熊楠日記に見る博物学から菌類学への軌跡 (1). くちくまの 73 号.

1989. 南方熊楠日記に見る博物学から菌類学への軌跡 (2). くちくまの 77 号.

1989. 南方熊楠日記に見る 20 世紀初頭の那智山附近のシダ植物と種子植物 (遺稿). くろしお (8).

眞砂久哉さんへの追悼記

小山周次郎 1989 :弔辞. 脇村獎学会「通信」No. 32 : 25.

中島章和(他) 1989. 真砂久哉会長追悼号. 紀州シダの会会報 (15) : 1-10.

菅井憲一 1990. 南方熊楠をめぐって—故眞砂久哉氏書簡. くちくまの 83 号.

(木村陽二郎 Yojiro KIMURA)

□チュリア・マハバラートの旅 (その 1)

A Botanical Journey to the Chulia and the Mahabarat Ranges, Central Nepal (1)

私は 1969 年から 2 年間、ネパールの Department of Medicinal Plants にコロンボプラン専門家として勤務し、当局が行う植物調査に参加した。日本側が企画する植物調査はそれまで 3 度体験しており、私としては慣れていたつもりであるが、ネパール人の中に一人加わった調査旅行は、それ迄の経験と全く異なるもので、外側から見て知っていた常識を改めるものだった。以下に当時日本へ書き送った通信文を集成して、調査旅行での見聞を記す。もう 20 年も昔のことではあるが、このコースを歩いた人はいないはずであるし、ネパールの現場を理解する一助になるものと思う。

2 月に着任して以来はじめての長期の旅を行って来ました。長期といつても 10 日間ですがなかなか大変な旅で、いささかアゴを出しかけました。しかしテライからカトマンズまで歩いて入った数すくない日本人の一人になりました。自動車や飛行機が入るようになってからは、はじめてではないでしょうか。

4 月 17 日 (1969 年) カトマンズからシムラまで飛行機で行きました。シムラはインドとネパールをつなぐ唯一¹⁾のハイウェイ (トリブーバンハ

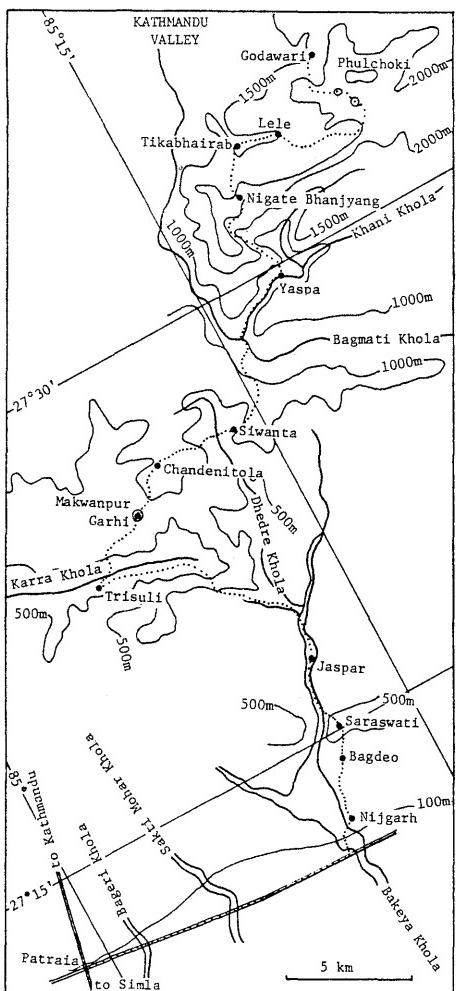


Fig. 1. コース図。

イウェイ) の始点、ビルガンジのそばの海拔 100 m、ここから歩くわけです。今は乾期の終わりで、冬の間中は晴天続きだったのが崩れやすくなり、前日までの好天がこの日は雨模様で雲が低くたれこめ、飛行機の出発が 30 分ほど遅れました。低いところへ行くからと薄着をしていたら寒くてたまりませんでした。出るゾというので乗りはじめたら、乗客が半分も乗らないうちにプロペラが廻りだし、無事に飛び上がったけれど高度は 2000 m、カトマンズの周囲の山は 2500~2700 m あるし、視界も悪く、ベルトを締めてないと天井にたたきつけられる程ゆれるし、光線の具合で翼にシワがよったり伸びたりしているように見えるし(本当にそうだったかもしれません)、オンボロの

DC3 なので大変気味が悪かったです。30 分足らずでシムラの草原の飛行場につきました。同行のネパールサーブの B 君の友人が森林官をやっているので、そこで昼食にしようと行ったら、ハイウェイに面した高床式の事務所にいました。彼の官舎で待つこと 1 時間半、2 人は座っておしゃべりをしているだけです。実はこの間にボーイがジャガイモをゆでてカレー煮にし、ゆで卵を作っていたのですが、こっちは何も知らないからただボンヤリ座っているだけでした。外へ出ようにも、ここへ着いた直後から雨まじりの猛烈な突風がやってきて、一時間以上も続いたので出ることができません。近くの農家の屋根がとばされ、家の人が草干し用の木枠にシートをかけてその下にもぐりこもうとするがシートがどうしても固定できず、今度は板切れを重しにのせておさえようとするがそれも吹きとばされ、とうとう 4 人かたまってシートをかぶってうずくまり、嵐のやむのを待っている…という一部始終を窓から見ていきました。乾期の終わりには、こういう突風と雷雨がときどきあるそうです。その頃になってやっと待望のオカズができあがり、カトマンズで買ったパンを食べることができました。このパンを買ったいきさつも妙なもので、B 君が「飛行機が遅れているからコーヒーをのもう」と空港のレストランに入ったとき、ついでのように 2 斤つながった食パンを買ったのです。このパンはホテル・アンナプルナ製で、カトマンズで一番うまいパンだそうです。飛行機が遅れなかったら屋メシはどんなものを食わされたかわかりません。とにかく屋メシが終わったら午後 4 時、B 君はこれからバザールへ行って買物をするというので、僕一人で先に行くことにしました。人夫や僕のシェルパは、とっくにキャンプ地へ先行していました。

インド・ネパールハイウェイを 40 分ばかり北へ歩くと、パトライアの十字路です。大きな看板があり、ここから東へ向かって東西公路が一直線に建設中です。この路はアジア・ハイウェイの一部で、この辺はソ連の援助で造っており、あたりには立派な職員アパートが並んでいます。ここから先はどうに行くのか聞いていなかったので、30 分ほど待ったけれど誰も来ず、次の部落で待

てばよいと勝手に北へ歩き出したのが間違いのもと、いくら行っても家一軒なく、そのうちに日が暮れかけてきました。両側はどこまでも続くサラソウジュのジャングルで、こんなところで迷子になるのは有り難くないなと思いはじめたとき、はるかかなたに掘建て小屋が見えました。うす暗くなつた頃やっとそこへ着いてみたら、運転手相手のうすぎたない茶屋でした。ちょうどそこへ後ろからやってきたトラックの運転手が、B君がもどれと言っているという伝言を持ってきました。茶をのみ終わって出発しようとしていたビルガンジ行きのトラックに乗せてもらい、さっきの分岐点まで引き返しました。僕が道端にいたからよかったですけれど、森の中で採集でもしていたら本当に迷子になるところでした。ウロおぼえのネパール語が早速役にたちました。トラックの運ちゃんに金を渡そうとしたら、受け取りませんでした。たいへん珍しいことです。

キャンプは道路建設基地を出はずれたジャングルの中にありました。道路人夫たちの小屋がけが並んでおり、連中は野生のアスパラガスをたくさん採っていました。

4月18日 東西公路は全くの一直線にジャングルを切り開いていて、はるか向こうに曲り角が見えるのですが、そこへ着いたのは午後おそくなつてからでした。日蔭が全くない路を一日中テクテク歩いたわけです。水も全く無し。昼は人夫が先行して河原で食事を作って待っていました。河原といつても水は流れおらず、砂を掘り下げてしみ出る水をためたところから汲んでくるのです。蛙が泳いでいました。

道の両側は *Shorea robusta* (サラソウジュ) の林で、*Shorea* 7, *Terminalia* 2, *Lagerstromia* 1 といった割合です。葉はまだ出ていません。その他の高木は *Eugenia*, *Ficus*, *Mallotus*, *Aegle*, *Albizia*, *Dillenia*, *Bombax* などです。林床はたいへん荒れています。放牧で牛や山羊が歩き回るためと、住民が材木を伐るためですが、野火も入っています。それでも *Shorea* の若木がかなり見られます。草は目立たず、*Clerodendron*, *Phyllanthus*, *Brideria*, *Trema*, *Kydia*, *Callicarpa*, *Desmodium* などが乱雑に生えていました。川沿いの低木の方

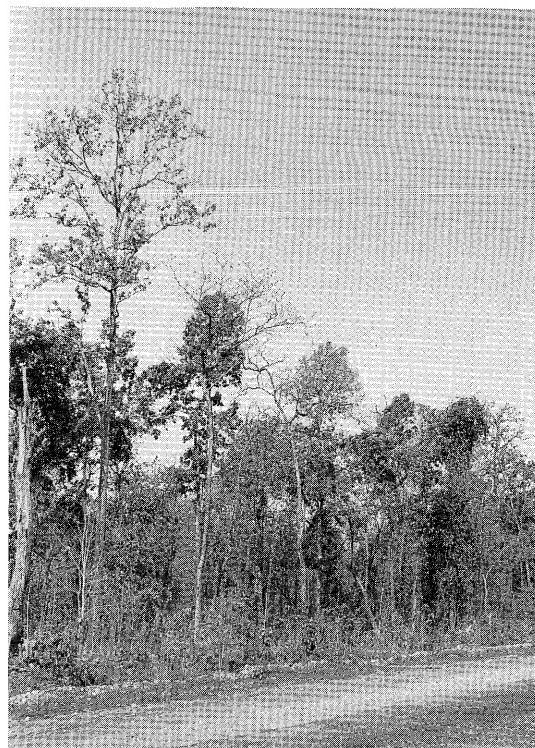


Fig. 2. Patraia 付近の *Shorea robusta* 林。

が、森の中のものよりも落葉の程度が甚だしいです。

夕方になってやっと道路をはずれ、河原を北上、一時間ばかり奥の部落を目指しました。工事の連中が「部落は川の左手だ」というから左側(右岸)を行けども行けども何もなく、そのうちに誰かが対岸に家があるというので、行ってみたらそこが目指すニジガルでした。もう夜8時近く、真っ暗でした。小学校(といっても土間の掘建て小屋)に入りましたが、虫がいそなのでその中にテントを張りました。この部落には犬が多く、それぞれ縄張りがあって、そこへ他の犬が入るとものすごく吠え立てて追い出します。我々の炊事場は雌の老犬の縄張りですが、これがゼンソク持ちで、おかしな咳をしゃっちゅうやっているくせに、いざ喧嘩となると咳は止まってしまっていいよく吠え立てます。部落の中央を流れる小川が飲料、食器洗い、洗濯、ごみ捨てを兼ねており、飲料水の汲み場を最上流にして、それぞれ場所が決まっているのだそうです。翌朝したら水は白く

濁っていました。この流れの上流がどうなっているのかは知りません。

4月19日 夜が明けてみたら、ニジガルは大きな部落でした。家の壁はソダを組んで作り、外側は泥できれいに塗ってあります。いわゆる hanging-wall 型で、ネパールやインドの、煉瓦や石で積み上げた壁とは異なります。壁の表面には動物や幾何学模様を浮き出させた家もありました。女性は全員膝から下に入れ墨をしています。

9時出発。

一時間ほど歩くといよいよヒマラヤの第一線、チュリア丘陵の登りにかかります。麓のバグデオの部落から15分も上がったら、珍しく小川がありました。といっても山はだからしみ出して100mほど流れで消えてしまうのですが、こんなところにも魚がいました。そこへ来たら人夫たちは荷を下ろして火の用意をはじめます。これから先は水がないことはわかっているけれど、さっき朝食をとって一時間半もしていないのにまたメシでは、時間つぶしでかなわんと思ったので、B君に

そう言ったら、メシはとり止めとなりました。実は人夫にとってはこれが朝食で、彼等は一日二食だから出がけには何も食べてないことが、ネパールで暮らすにつれてわかってきました。さっきの朝食は実は三食食べないと動けない僕のためにわざわざ用意してくれたもので、実をいうとB君も一日二食があたりまえなのです。こちらの常識のままに外国で行動することが、たいへん非常識な行動になるということを、あとになるほど感じました。

この山は600mほどで全山サラソウジュ林ですが、平地のそれよりも *Shorea* の割合が高く、下で見なかった *Phoenix* があったりします。水は以後一滴も無し。のどがカサカサなのにB君はキャンデーをくれます。こんな食べたら口の中がベタベタになってかなわないけれど、くれるものはもらう主義なので食べました。僕の持っている食品は酢昆布一箱と柿の種一つまみ（それも食べ残して粉々になったもの）だけで、あとはあちらまかせなのです。酢昆布を一枚食べてみたら、

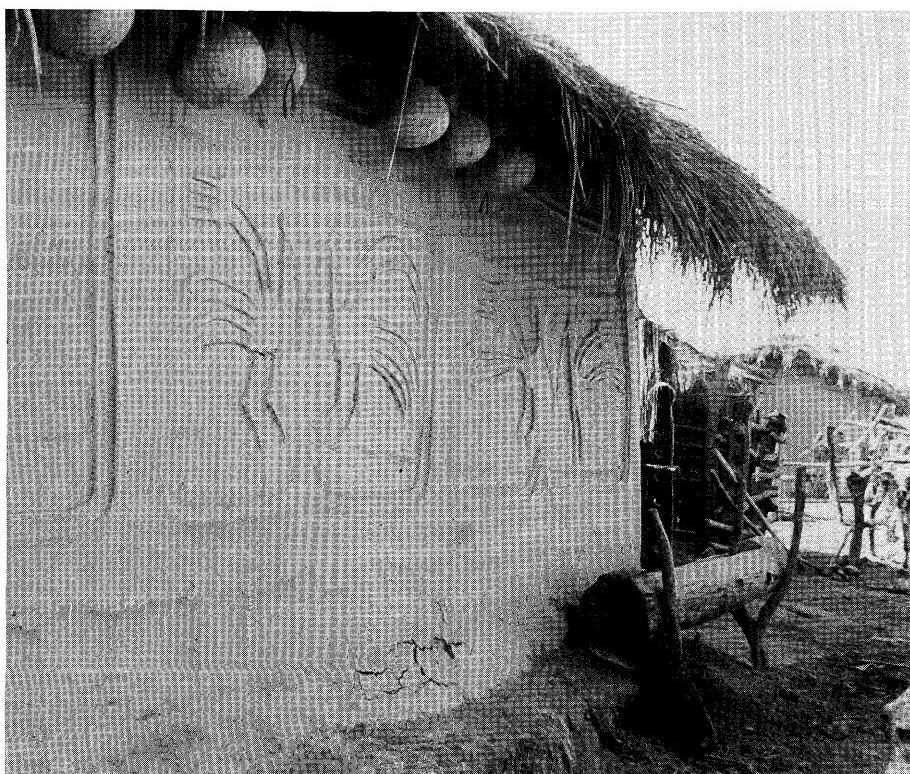


Fig. 3. Nijgar の家の壁。

はじめのうちはよかったですけれど、膨潤してきたら逆に水分を吸収してしまい、口の中は脱水状態になってしまいました。やっとのことでの頂上についたら、そこにサラスワティの部落がありました。このあたりでは山の南側は急斜面で岩ゴツで暑いせいか木立ばかり、北側はややゆるくて耕地や部落があります。とりあえず農家で水をもらいました。どこかのたまり水を汲んできたのですが、生水はだめなんて言ってるようではありません。ただ困るのは、水の入っている壺に口をつけることはタブーなのです。このことは衛生上なかなか意味があると思います。彼等の飲み方は、顔を45度くらい空に向け、下顎をつき出し、水壺を高くさしあげて口中へ水を流しこみながら、口をふさぐことなく水を飲み下すのですが、僕には二つの点でむずかしいのです。一つは口の中へ水が落ちず、顔や服にかかってしまうし、入ったとしても適量の調節ができないから、たちまちあふれてしまします。もう一つは、口をふさがないで水のみ下せないので、彼等のように連続的に注入と嚥下をやるわけにゆきません。ビニルチューブを

つっこんで吸い上げるのならよいかと思ったら、これもいけないそうで、結局皿のような食器に注いでもらって飲みました。

ここで昼食となったのですが、昼食には実に4時間を要しました。この日に限らず、昼食にはいつも3~4時間かかります。炊事1.5~2時間、食事30分、人夫の食事30分、片づけと荷作り1時間といったところです。見ているとこの区分の一つ一つはそんなにかかっていないのですが、どういうわけか全体としてはこんなになってしまっています。とにかく出発は午後4時。

北斜面を滑り下るようにして河原に出ました。これからは川沿いで、1時間あまりの間に10回の渡渉です。川幅約20m、深さ膝上10cm、所によっては股まで。乾期なので流れがゆるいからよいけれど、川床はコケでぬるぬるしていてかないません。靴をぬいだりはいたりが面倒くさいので裸足のまま歩きましたが、河原の小石が痛くて長続きしません。半ズボンとゴム草履があつたらなと思いました。暗くなってちょうどよいキャンプ地があるので、B君は泊まろうとせず、まだ先に



Fig. 4. Saraswati より西望.

行くというのです。すぐ上の段丘面に人家がありそうで、泊まるにはよい条件なのに、彼ははるか彼方の河原に火が見えるから、そこまで行くというのです。あいにくと新月でもう真っ暗な中を、星明かりを頼りにまた渡渉を3回やって火の所へ行ってみたら、たき火の残り火だけで誰も居らず、ともかくそこへ泊まることになりました。

ここ迄くると、川水を飲むことなどは何でもありません。Human origin の N がたっぷり入っていることは間違いないのですが…。クレオソートは持っていましたが、B君が使わないからこっちもわざと使いませんでした。腹の具合は何ともなかったです。川の水を飲むときには、ガラスのコップに汲んで明かりにすかしてみます。水が濁っておらず、ごみもなく、温度が低いということが飲めるか否かの判定基準です。不合格の場合にはこれを捨て、川の別な箇所の水を汲んで同様に判定し、OK なら飲みます。B君は錠剤のソーダ水を持っています。Made in Japan ですが名も知らない会社で、おそろしくまずいです。サッカリンで甘味をつけ、ストロベリーだのメロンだのと色をつけ、重曹の味がコッテリするのですが、カトマンズではよく売れ、これが入ってからはビンづめジュースの売れ行きが落ちたそうです。その錠剤を殺菌のためか、水をのむとき入れてくれます。一度などは湯の中に入れてくれました。オカンをつけたサイダーを飲んだのは初めてです。

4月20日 川はチュリアの褶曲山脈を横切っているので、河岸の地層が45度くらい傾き、山稜がそれに応じた形をしているのがよくわかります(Fig. 4)。この川は奥が浅いのですが、高差10mくらいの河岸段丘が少なくとも2段あります。これをインド平原の方へ延長してみても、対応する地形はなさそうです。ヒマラヤの隆起の激しさを示すものでしょう。

今日は渡渉は5回くらいですみました。森林はあいかわらずサラソウジュで、林床に火が入っているのでカサカサです。一ヶ所だけちょっとした谷間が焼けておらず、小川も流れていて、*Pandanus*, *Lasia*, *Alpinia*, *Plagiogyria*, *Cyathea*, *Angiopteris* などが生えており、大きすぎて種類の見当もつかない常緑樹がうっそうと茂って居る

所がありました。ここは本流ではなく、段丘の小地域で、こんなところが点々とあるのではないかと思います。やがて谷がひらけて部落が点在、ここから西の支流に入るところで昼食となりました。B君は植物園に持っていくと、さっきの常緑樹林からヘゴやリュウビンタイの株を10本ばかり人夫にかつがせてきました。僕は12時に着いたけれど、彼はこのために1時半に到着。それから川で水浴びです。川といつてもよどんで泥の多い所ですが、彼は気持ちよさそうにつかっています。人夫達もその間に着物の洗濯、とにかく30分もすれば乾いてしまうから簡単です。僕のシェルパはリュックサックを洗濯しましたが、これも出かける迄にはちゃんと乾いていました。

飯が終わるとB君はゴロリと横になって昼寝。そばで人夫が標本作りです。グランドシートの上に飯粒が落ちているのを人夫に掃除させるのですが、鼻先3cmほどのところで箒を使っても、彼は微動だにしません。飯粒だって指先ではじきとばしてしまえば済むのに、わざわざ人夫を呼んで肘枕をした腕の下まで掃除させるのです。ネパールサーブはずいぶんよいお身分です。家庭でもこうなのでしょうか。歩くときだって、僕は大きなリュックサックを背負っているのに、彼は小さな書類入れ一つです。この中に入っている物は鏡(ひげそりのときこれと石鹼を人夫に持たせる), キャンダー, サイダー錠, 旅行証明書, 金です。採集も、彼の指示で人夫が採ります。人夫が見ればB君は日本人のコレクターを雇ったなと思うことでしょう。どう見てもこっちの方が偉そうにはみえません。

3時頃出発。このあたり一帯は、最近作られた焼き畑です。支流をつめて行くと *Gnetum* などが出て来て面白くなってきたけれど、暗くなるし、先行きが不明なので早々にとばしました。谷のどんづまりを200mほど急登したら峠で、むこうは緩い斜面の広々とした開拓地でした。最初の部落で泊まるというので荷物を下ろしたけれど、一向に泊まる気配はなく、そのうちに日が暮れてうす暗くなってから、もう1kos(2マイル)先のトリスリバザールを目指すことになりました。1kos は1時間強ですが、こちらの人の感覚で、相

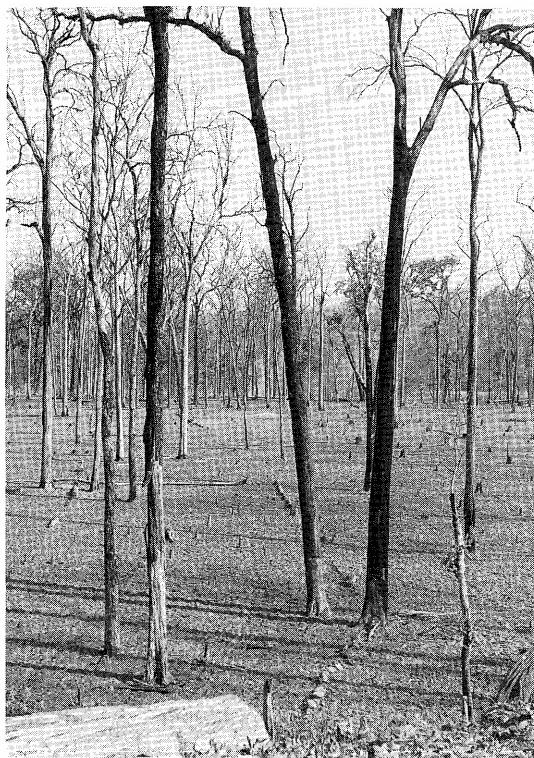


Fig. 5. Jaspar 上流の焼畑。樹幹は *Shorea robusta*.

対的に近いところは 1 kos になってしまふので、アテにはなりません。僕と B 君は急いで歩いて 7 時ころ着きましたが、人夫が着いたのは 8 時頃、晩飯にありついたのはなんと午後 11 時半でした。

B 君が大きい部落に泊まろうとする理由は、旅行証明 (milage certificate) をもらうためなのです。彼等公務員の出張費は日当と距離手當てから成り立っており、人夫の給料も同じです。人夫は役所の下級職員がやります。出張費用は日数と距離に応じた概算額をもらってきてますが、それだけの距離を歩いたという証明を各地の役所でとらねばなりません。旅行証明にサインできるのは各部落にあるパンチャヤットという 5 人の顔役会議のメンバーだけなのです。B 君は今日は最初の部落に泊まりたかったけれど、そこにパンチャヤットがいなかったので、コースとしては遠回りになるのにこのバザールまでやってきたのです。

4 月 21 日 部落にめずらしく井戸があったので、深さをはかったら約 10 m ありました。ゆるい傾斜の広い谷で、すこし下がれば田圃がひろ

がっているにしては、深いなと思いました。ここも昨日と同じ、サラソウジュの林を焼き払って畑にしたところですが、新興工業都市のヒタウラを控えているうえ、もともとネパール最大の米作地帯なので人口が多く、焼け残りの樹幹もありません。ヒタウラからトラック道路が通じています。ゆるい斜面を北に下ると広々とした田圃ですが、暑くてたまりません。それがすむと—昨日のような岩山の登りで、ここもサラソウジュです。真っ先に上っていったら中腹で大きな道にぶつかり、それを右にたどって行って尾根の上にでました。僕以外の人達は道を横切ってまっすぐ上がってしまったので、僕だけ一人になってしまいました。この時の暑さは殺人的で、何か叫び出したくなるようでした。雨傘をさして日除けにするのですが、肩にかつぐとわずかにある空気の流れがさえぎられて一層暑く、垂直に持つと傘の面が二次の熱源となってその焦点に頭を置くことになってこれまたやり切れません。傘の布は黒くなくてもよいのだから、この次には銀メッキでもしたものを持って来ようと思いました。尾根にでると例によって北面に農家があったので水をもらいました。ずい分にごっていましたが、無いよりまして。こういうときには片言でもネパール語を習っておいてよかったです。そのうちに他の連中もやってきて、ここで昼食になりました。村の水場は北にすこし下った藪の中の地面を掘り下げ、点々としたたる水を受けるのです。だから村中の水壺がたくさん並べられ、子供達がおしゃべりをしながら番をしていました。

この直ぐ先の山の頂上に Makwanpur Garhi の城跡があります。1814 年のネ・英戦争の古戦場です。ブータンのゾンのようなものかと思ったら、カルカッタにあるフォート・ウェリアムスと同じ、空濠をめぐらした五稜郭のようなとりででした。チャンデニトーラ泊まり。夕方、初日と同様なものすごい突風と豪雨と雷があり、テントを支えるのに一苦労しました。テントのポールに落雷するかと心配しました。乾期と雨期の境目で、気象が不安定になるみたいです。

4 月 22 日 B 君は食欲が無いといって炭酸水をのんでいます。これはサイダー錠とは別で、カ



Fig. 6. 村の水場。

トマンズの薬屋で売っている粉末です。この食欲不振は、たぶん僕の食習慣に合わせて3食とっているための変調でしょう。このあとでも、一しょに歩いたネパールサーブがもらしたことがあります。彼はよく働き、寝るのはいつも僕よりもあとで、12時前後です。僕と張り合うつもりで頑張っているのなら気の毒なので、わざと早目にテントに引き上げるのですが、彼はそういうつもりではないらしく、毎晩遅くまで標本の紙を取り替えています。彼等のやり方は、吸湿紙の間に標本を直接はさみ、翌日は別な吸湿紙にはさみ換えます。しかもこれは人夫の仕事で、茎を指でつまんで移しており、全体の形が崩れないような配慮はしませ

ん。だから標本は次第にクシャクシャになり、落ちやすい花や果実はみんなとれてしまい、最後まで茎にしがみついていられた部分だけが標本になります。湿った紙は、昼間なら地面にしばらくひろげ、夜なら焚火に海苔をあぶる程度にサッとかざして使います。空気が乾いているので放っておいても乾くから、これくらいの処理で十分なのです。僕の方は日本式なので新聞紙が不足し、毎日標本を積み替えて風を通すだけ、従ってなかなか乾きません。不思議なのは、こんなやり方でも、カビが生えたり腐ったりすることが非常に少ないことです。17日に採ったものをこうやって25日まで半乾きのまま持ち歩き、日射で包みの中はずいぶん高温になりましたが、葉が離れたり黒変したりした程度で、腐ったものは少ないのです。彼等は我々のように標本をパリパリになるまでは乾かしません。すこしシナシナする程度を良しとします。これは標本の貼り方と関係があります。彼等は標本の一面に糊を塗り、直接台紙に貼りつけるという英國方式なので、あまりピンと乾いていると貼りにくいのです。ですから私の標本はあとでマウンターから「硬すぎる」と文句をいわれました。

(注) 最近もう一本できた。

(金井弘夫 Hiroo KANAI)

□大和市教育委員会(編):大和市の植物 164pp.
1991. 非売品. 神奈川県のほぼ中央・横浜・藤沢・綾瀬・海老名・座間・相模原の各市と東京都町田市に囲まれた大和市は、南北に長い地域を占めている。横浜や東京に近い関係で、昭和34年の市制施行以来30年の間に人口も宅地も4~5倍にふくれ、田畠や山林など緑が急激に減少した。同市は緑地保全事業計画のため市域の動植物の生態調査を昭和62年度から4年計画で実施してきた。脊椎動物・昆虫・植物の3部会のうち、武井尚氏ほか13氏の会員が9調査区を分担してまとめた植物部会の結果が本書「大和市文化財調査報告書第40集——大和市動植物総合調査報告書2」である。大和市は大部分が平坦な相模原台地の上にあり、標

高40~80mで北に高く南に低い。神奈川県の低地に分布する種類が多い中に、多摩丘陵や丹沢・箱根など山地丘陵性の種類が混じり、県内での分布上問題のある種類や希少種類が171種取り上げ解説されている。帰化・逸出植物は年々増加している。次いで9調査区内それぞれの詳しい説明があり、シダ植物以上の目録には和名・学名などに加えて各調査区での有無が載っている。種数はシダ57、裸子10、双子葉類560、単子葉類198の合計825である。カラー写真60、白黒写真および地図多数、2万分の一地図1枚がある。付録として同市の天然記念物・保存樹木・古木巨木・街路樹・市の木・市の花のリストや説明がある。

(伊藤 洋)